



Obihiro Aoi Gakuen Information

学校法人 帯広葵学園

学園通信

◆2022年（令和4年）8月23日発行

◆Vol.61

故きを温ねて、新しきを知る
～帯広葵学園のあしあと～

気になる《いじは》を持っていますか

学校法人帯広葵学園

理事長 上野敏郎

50年以上過ぎてても、忘れない言葉が私にはあります。それは、「おとなはだれでもはじめは子どもだった。けれども、このことを忘れずにいるおとなはいくらもない。いつまでも子ども心忘れずにいるおとなこそほんとうのおとなである」という言葉です。

この言葉と初めて接したのは、1967年です。ちょうど55年前です。私が19歳になったばかりの頃になります。山形県の鶴岡という小さな町から大都会東京に出たばかりの話です。そこで私は、高島巖先生と出会いました。先生は、当時東京の西荻窪にあった双葉園という養護施設の園長先生をしていました。その高島先生を私は、高校時代一人のボランティアとして通っていた養護施設「七窪思恩園」の日野三郎太園長先生からのご紹介で訪問する機会を得たのでした。

高島先生は、富士新報福祉事業団が主催するボランティアスクールの主任講師を務めていました。福祉の世界で働くことを目標にしていた私は、すぐそのスクールの受講生になります。まだ、「ボランティア」という言葉や考え方が世の中に知れ渡っていなかった時代です。

そのスクールの講義の中で高島先生は、フランスの作家サン・テグジュペリの書いた「星の王子さま」の中で出てくる「おとなはだれでもはじめは子どもだった。」という言葉を取り上げ、その言葉の持つ意味を詳しく解説してくれたのでした。そして先生は、「要するに、人間のしあわせは、心と心のつながりからはじまるのだよ」と結んだのです。

その結びの説明は、いかにも抽象的で分かりにくかったのですが、妙に納得した自分を今でも忘れません。

しかし、その納得した気分のまま、もう一度「だれでもはじめは子どもだった」の言葉に戻ると、そこに答えがあるようにも思ったのでした。凡人の私は、未だにその世界を行ったり来たりを繰り返すのでした。この夏、また「星の王子さま」を読み直しています。

【星の王子さま】

著 者：アントワヌ・ド・

サン＝テグジュペリ

訳 者：河野万里子

出版社：岩波書店



学校法人 帯広葵学園

〒080-0022

帯広市西12条南17丁目3 難波ビル2F

TEL 0155-23-7604 / FAX 0155-67-5778

URL <https://www.obihiraaoi.ed.jp/>



帯広の森幼稚園



012おびもり



つづきが丘幼稚園



012 青い鳥保育園



緑陽台認定こども園



柳町認定こども園



駒場認定こども園



あおいキッズランド



東土狩保育所・南中音更保育所・西中音更保育所



あおいとり
プラス